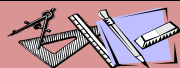


1 ポイント (特に工夫した項目に○ いくつでも)

作成者: 1・2年1組 (齊藤・鮎澤)

( 小学部)



教材教具の工夫

1 実態に合っているか?	○
2 ねらいが明確か?	
3 興味関心を生かしているか?	○
4 シンプルで誰でも再現可能か?	○
5 一目で動作をイメージできるか?	
6 児童生徒も教師も使いやすいか?	○
7 実際の生活や他の場面で生かせるか?	

2 児童生徒の実態 (個人またはグループ)

- ・学級運営上、必要と思われる係を設定した。児童ごとに係を分担し、仕事をお願いした。児童は進んで係を担当してくれた。だが、担当した係の仕事を毎日行うことは難しく、やることを忘れてしまうこともしばしば見られた。帰りの会で指導者から係の仕事について尋ねられ、やっていないことを確認する日々が続いた。必要があつて設定した係であるため、児童が自身で確認した上で、毎日実施することが望まれた。
- ・登校直後の朝の活動で、ランドセルをロッカーに入れたり運動着に着替えたりするなど、毎日必ず行う活動がある。児童も必要な活動であると思つていても、関心が他に移ってしまい、なかなか活動に取り掛かることができない実態が見られた。そのままだと学習の諸準備が整わず、学習活動に支障が生じてしまう。そのため、児童が自身で確認した上で、実施することのできる手法が望まれた。

3 教材教具のねらい

- ・活動の内容と順番が一覧として確認することができる。
  - ・どこまで活動が終了し、次に何をすればよいかが見てわかる。
  - ・児童が容易に、面白く操作することができる。
- 次の活動に自分で取り掛かることができる。

4 改善の経緯

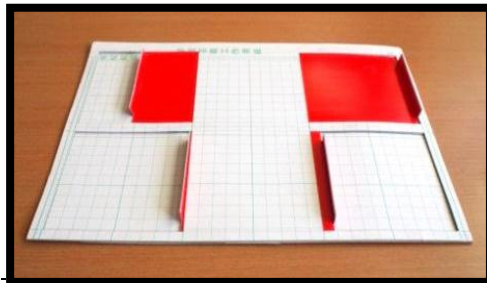
(1) チェックボードの発想

- ・つまみを持ってスライドさせることによりチェック機能 (二元的表示) を持たせることができるボードを作成。児童に操作させたところ面白がつてスライドさせる姿が見られた。これは使えると判断した。
- ・動きは双方向が可能で、容易に元の状態に戻すことができた。また、数百回の操作にも耐え故障することはなかった。基本的な形はこれで良いと思われた。



(2) 可動表示部の拡大・色の使用

- ・表示の変化が良くわかるように、つまりチェック機能を明確にするためにスライド部を大きくし、着色した。色がついたことで児童の関心が高まり、操作したがる姿が見られた。だが、スライド



改善のポイント!!

- ・スライド幅を大きくすることで操作している実感がある。
- ・可動部の隙間を十分な大きさとし、操作の途中で引っかかることがないようにした。
- ・スライド部を二段にし、左右両方向に動かすことを考えたが、スライドさせる方向が左右で逆になり、かえって操作性が低下した。
- ・色による表示は変化が (チェックが) はっきりわかり、児童の関心を高めることに効果があつた。

部分が大きくなった分接触する面積が大きく、従って摩擦が大きくなったために動きが悪くなった。

### (3) 可動表示部の縮小・文字の使用

- 可動部分を元の大きさに縮小し、可動性を良くした。また、チェック項目の内容を文字で表記した。

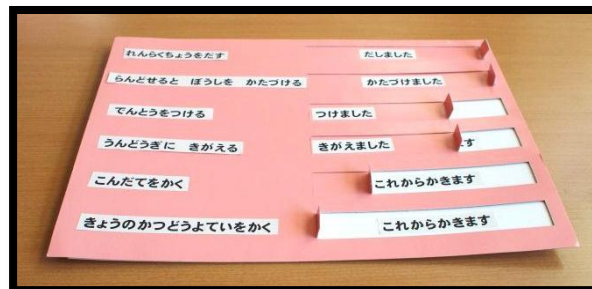
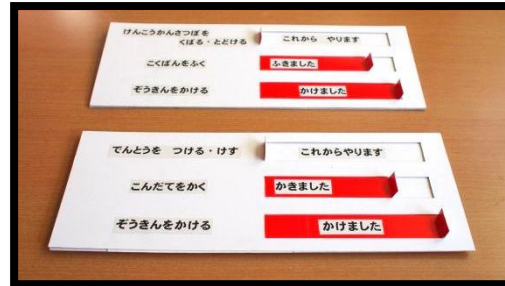
可動部を小さくしたことによる操作性の劣化は見られず、児童はスムーズに操作していた。文字表記により、児童が何をチェックするのかがわかり、文字を読みながら自身で操作を通してチェックした。

- この段階で児童は、担当した係の仕事と清掃の雑巾がけを行ったかどうか自身でチェックするようになった。友だちが都合で仕事をするのが難しい時には替りに行ったり、不十分なときにはスライドを途中で留めて再び仕事に取り掛かったりする姿が見られるようになった。

- 自分がどのような仕事を担当しているかを理解し、その仕事をやり切ろうとする意識を高めることができた。

### (4) 活動の内容（種類）の増加

- 登校直後に行う、学習準備の一連の活動をボードに設定した。



- 仕事をする前は「これから〇〇します」仕事をした後は「やりました」の表記とし、声に出して読むことで前後の話し方をとらえることができるようにした。
- スライド部にある程度の長さを持たせたために、仕事の途中や全部やり切れていないときには途中で留めておく使い方がなされた。児童が考えた。

- 活動の流れに沿って順序性を持たせ、活動が効率よく進むようにした。

### (5) 12月現在の使用例や児童生徒の様子

- ボードの活動項目を読んで次の仕事を知り、自分で取り組む。終了するとボードのスライド部を動かし、活動の終わりを確認するとともに次に行う仕事を知る。このような使い方ができるようになり、ボードで確認することで朝の準の活動が一人でも可能になった。
- 使い続けているうちに活動の項目と順序を覚えて、ボードを見なくても次の活動がわかるようになってきた。



### 今後の改善や使用について

- 児童は確認の手段として使用しているようで、ボードを一瞥することで、次の活動に取り組み、やり終えることができるようになった。本教材は役割を終えつつあると思われる。
- 今後はボードの使用頻度を小さくしていき、まったく使用しなくても活動することができるようにしていく。
- 現在とは異なる場面での使用を検討する。三学期になってから係替えの際に異なる項目で使用する。
- 仕事の実施前と実施後の話し方（言葉による表現）を、より場面に適したものに変え、表現の一つの手がかりとして使用する。